

和泉の観ボラだより 第20号

和泉観光ボランティアクラブ 2019年10月発行

古刹紹介
松尾寺



本堂(金堂)と右奥の三天堂(2018.10.13)

泉州 松尾寺の歴史と境内の概要

「阿弥陀山 松尾寺」の御本尊は如意輪観世音菩薩で、現在は天台宗に属し比叡山延暦寺の末寺です。

【創建は白鳳時代】

松尾寺の縁起によると、阿弥陀山の開基は白鳳時代の672年(天武天皇元年)役行者が7日間修法し霊木を得て如意輪観音を刻んで安置したことに始まります。その後越前国の泰澄大師が阿弥陀山に入山し中興したと伝えられています。



山門(2018.12.2)

錦秋のいろどり
松尾寺春季大法会
人々の心によりそう



上記の写真は、4月第1日曜日に行う「御影供」の様子です。
山伏の問答・天に矢を放つ・採灯大護摩供・火渡り巖修などが行われます。

観光ガイドへのお問い合わせ先は下記にお願いします

〒594-0071 和泉市府中町 1-19-9 (和泉府中駅前)

和泉市いずみの国観光おもてなし処 気付「和泉観光ボランティアクラブ」

TEL : 0725-40-5552 、 FAX : 0725-40-5553



松尾寺の興亡と再興

【白鳳時代(8世紀頃)】

軒丸瓦が境内から出土しており、この頃すでに瓦葺の堂宇が建てられていたと思われます。

【平安時代(8世紀～)】

前期の書「日本往生極楽記」によると、河内国の見習僧沙弥尋裕が和泉の山寺で天台宗の浄土教信仰の修行をしました。なお「山寺」とは、俗世間から一定の距離を保ち、僧尼が修行するに相応しい環境にある寺院をいいます。この頃、如意輪観音像が本尊として安置されたと考えられ、真言系修験者よって真言密教寺院化されたと思われます。

【鎌倉時代(13世紀～)】

当寺は教義を広め、民衆の心を捉えると共に、時の政権に接近し寺の立場を強化して繁栄しました。貞応元年(1122)真言修法の寺院となり、天台(顕教)と真言(密教)を共に修する顕密兼修の一山寺院となりました。さらに当寺の僧が春木庄の荘官となり、荘園経営を掌握し続けました。

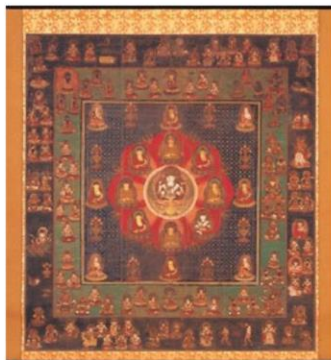
【南北朝期～室町時代(14～16世紀)】

南北朝期には南朝の祈願所となり、南北朝合一後は室町幕府の帰依を受けました。

【松尾寺の最盛期(15世紀～16世紀前半)】

この時期、松尾寺の寺領は約7000石に達したといわれています。寺坊も300寺余り、数千人の僧兵を擁していたと伝えられています。その後政権を執った織田信長も、天正5年(1577)禁制を下し、当寺の保護を約束しましたが、4年後の天正9年、高野山攻めの際に松尾寺も攻撃し、阿弥陀山諸堂を総て焼き払ってしまいました。この時、危機を察した塔頭日輪院法印 長瑜は81歳の高齢ながら寺宝、文書などを堺の念仏寺に避難させました。今も焼き討ち前の寺宝などが残っているのは長瑜の功績に負うところが大きいといえましょう。「松尾寺破滅記」は長瑜の筆に拠ります。30寺余りあった寺坊も宝瓶院と明王院の2ヶ寺のみが現存しています。

出典：和泉市資料「躍進」重要文化財 孔雀経曼荼羅



【豊臣時代から江戸時代(16世紀～)】

慶長7年から明暦2年(1602～56)にかけて豊臣秀頼によって松尾寺の復興普請が進められました。金堂(本堂)は四天王寺の阿弥陀堂を移築したと伝えられています。平安期沙弥尋裕が修行した記録から天台宗の寺院になり、ました。明治維新後は社寺制度の変遷を経て現在に至っています。

松尾寺の境内



境内の紅葉(2016.11.24)

【石段】 松尾寺を訪ねるには、木々に覆われた石段を登るようお勧めします。かなりきつい勾配の石段は人の煩惱と同じ百八段あるといわれています。(脇道があり自動車通行可)

【首堂】 石段の中ほど左手の狭い平地に小さなお堂があります。首堂といい、源平の一の谷合戦で戦死した敵味方の将兵の首を分け隔てなく、源義経が3艘の船に乗せ、四天王寺と堺の港寺及び松尾寺に送り、供養するよう依頼しました。当寺では供養した墓の上にこのお堂を建てました。首堂は織田信長の焼き討ちで全山焼失の際にも焼けずに残ったと伝えられ、奇跡に近いものを感じます。

【山門】 石段を上まで登って行くと古色蒼然とした山門に辿り着きます。宝永2年(1705)に建立され、総楠造で釘を1本も使っていません。楼上には文殊菩薩を祀り、当寺は学問を重んじる寺であったことが伺えます。山門の両脇には護法神の持国天(左)と増長天(右)が寺を護るように立っています。山門を潜り、木漏れ日に抱かれ金堂に導かれます。

【金堂(本堂)】 八間四面。本尊の如意輪観世音菩薩、聖徳太子、伝教大師、役行者、元三大師、泰澄大師、阿弥陀如来を祀り、昭和46年大阪府文化財に指定されました。

【穀衆三天堂】 本堂の前にあり、大日如来、阿弥陀如来、松尾明神などを祀っています。早魃の年には、このお堂で1週間雨乞いの祈禱をします。それでも降らないときは明神の御神体を神輿に乗せ、村々を巡行したと伝えられ、この風習は昭和20年ころまで行われておりました。

【鐘楼】 三天堂の傍らにあり、江戸前期の貞亨4年(1687)鑄造されました。昭和18年、戦時供出の為下ろされましたが、終戦により再び鐘楼に設置されました。境内にはさらに多くの御堂などがありますが、紙幅の関係で説明を省略いたしました。是非お訪ね頂き、奥深い歴史と四季を体感して下さい。

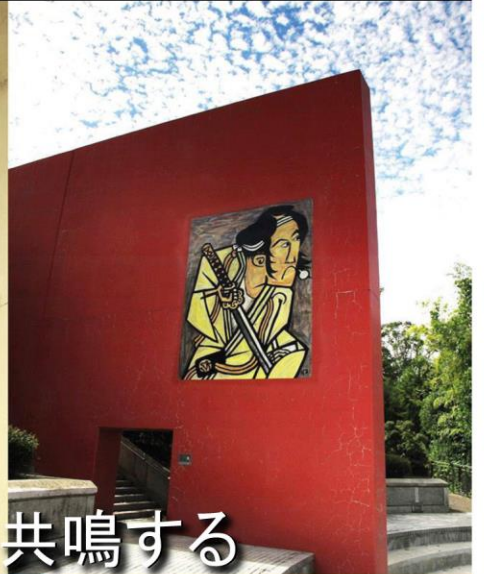
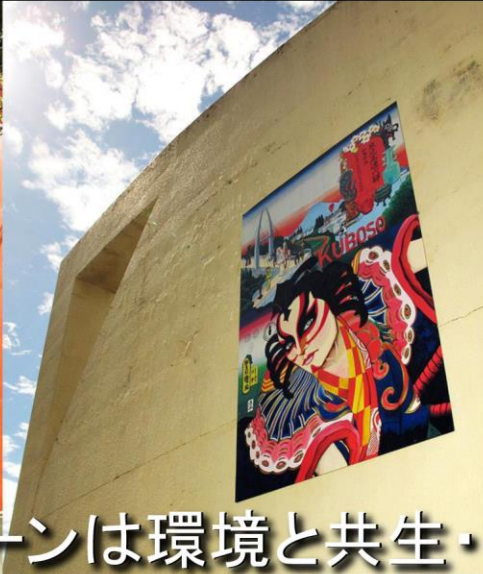
(渡邊勉治郎)

ART GUSH 作品展示について



美術館から
あふれだす
物語り。

その日、美術館から30点のコレクションが
姿を変え、和泉のまちにあふれ出した。
北斎や写楽、モネやゴッホらが残した美の
物語を伝えるために一。



アートシーンは環境と共生・共鳴する

響きあう30作品達



皆様、今まさに芸術・文化の秋です。

今年3月に公開されたART GUSH(町にアートがあふれだす)は、和泉市と久保惣記念美術館による、美術館所蔵芸術品及び工芸品を基に、グラフィックアートへ再描画した活動で、姿を変えて町に溢れだした、時代を切り拓く作品展示です。

和泉中央駅から久保惣記念美術館までの約2kmの道のりに、松本零士氏・弘兼憲史氏の2018年度パブリックアート制作展示を皮切りに、関西所縁のクリエイター30組により、北斎や写楽・モネ・ゴッホ等の作品がリライト(再描画)され、現代建築と自然に共生・共鳴した作品達は大変モダンで見応えがあります。

■ART GUSH 作品展示コースのご案内

全作品を巡る鑑賞は時間を要する為、ご来訪年齢層・季節への配慮が必要と感じています。

桃山学院大学・宮ノ上公園エリアでの作品鑑賞は、豊かな木々の緑・学舎と作品群との調和をお楽しみ頂け、和泉シティプラザ周辺エリアでのご鑑賞は、現代建築の中での作品の共鳴をお感じ頂けると思います。

鑑賞コースは、和泉中央駅から久保惣記念美術館に至る全鑑賞コースの他に、 HALFコースとして和泉シティプラザ周辺、そして桃山学院大学・宮ノ上公園の2エリアを設定し、それぞれの魅力を余すところなくご説明出来る様に取り組んでいます。

従来の芸術とは違う、現代グラフィックアートのダイナミックさや、心を引きつける新鮮さに気づかされ、ご案内できることを楽しみにしています。皆様、是非お越し頂き、和泉の秋景色とアートシーンをお楽しみください。

3頁「ART GUSH」作品画像は、紙面の関係でイメージ表現とし、現地での雰囲気をお伝え出来る様にしています。ご容赦ください。

作品詳細説明は、パンフレット「ART GUSH IZUMI CITY」を、和泉中央駅とJR和泉府中駅前の、和泉市いずみの国観光おもてなし処でお渡ししています。

■いずみの国おもてなし処和泉府中での講座



聖神社お神輿



信太連合だんじり



父鬼の笹踊り(今年は南部リージョンセンターで、10月26日(土))



1964東京オリンピック(出典:和泉市20年の歩み) (山出 弘)

「知ってますか?いずみのあんなトコこんなトコ」をテーマに、和泉市のお祭り等をスクリーンで紹介しました。

聖神社のお祭りは、ダンジリとお神輿が両方出てきます。ダンジリは9町9基ありますが、お神輿は1基だけ。これを9町が毎年交代で担ぎます。和泉の地名の由来でもある府中の和泉井上神社のエベッサン。この時期(1月9~11日)は、和泉五社総社を拝観させてもらえます。

南部の南横山保存会が守っている父鬼の笹踊りは、ユーモラスな面を被り笹を配ったり、子供たちが大きな太鼓を叩いて練り歩きます。

松尾寺の春季大法会では、空に矢を射る儀式・採灯大護摩供・火渡り巖修などの神事が山伏達により行われ、市民も参加できます。(1面参照)

続いて昔と今を見比べる定点写真です。開発中の和泉中央と現在の様子。JR信太山駅前に池の有った頃のモノ、1964年東京オリンピックの聖火ランナー等、懐かしい昭和の頃の写真を紹介しました。さて来年4月15日には和泉市を聖火ランナーが走る予定です。

【編集後記】 編集にご寄稿・ご協力頂きました皆様に心より感謝致します。和泉市には古の街道や町屋が数多くあり、そして緑豊かな自然や山懐に抱かれた古刹の数々を調べる中で、育まれた文化の奥深さや、歴史の面白さを再認識させられ、そして古の伝説や地域伝統芸能にはワクワクさせられます。編集責任者としての役割の中で、筆者の温かみを感じたり、納得させられたり、知り得る「役得!」を感じています。 信太連合のだんじり・みこし祭は、今年は10月13日(日)・14日(月・休)両日のため今回は間に合いません。来年をお楽しみ下さい。(渡辺廣史)